

# 第1回報告書 | 津田啓仁、船橋陽馬、白田佐輔 ショーケース公演@陸前高田にて

Hiroto Tsuda, Yoma Funabashi, and Sasuke Hakuta



『髪長姫』は、日本の三陸地方の芸能団体、インドネシアの舞踊チームOmah Gamelan、台湾の音楽チーム陳世興・陳光輝の3カ国・地域による国際共同制作舞台作品である。

そのショーケース公演が2025年10月12日(日)、岩手県の陸前高田市民文化会館「奇跡の一本松ホール」を会場に行われた。

秋田県を拠点に活動する文化人類学者でアーティストの津田啓仁が前半の2日間、写真家でマタギの船橋陽馬、NPO法人アーツセンターあきたコーディネーターの白田佐輔が後半の3日間、合計5日間の制作過程を取材した。

本文では、津田と白田がそれぞれ詳細に記した日記と、船橋が撮影した写真をもとに、この制作過程を振り返る。

## 「国境を越えて広がる作品」を目指して

A: 今回のプロジェクトの発端は、2021年の「ふえLab」の公演なんだよね。笛をテーマにアジア各国の郷

土芸能をつなぐ試みとして、アートや防災を通して地域社会に関わる「みんなのしるし合同会社」を中心に、複数の芸能グループと共同作品を作っていた。ただコロナ禍で対面実施が困難になり、各地で収録した映像を編集して発表する形になった。

B: その結末に「ふえLab」の方々は悔しい思いを持ってみたい。そして、2025年、ようやく本番をやるぞ！という形で今回の公演に至っているそう。

A: てことは4年越しの念願のプロジェクトなのか。

B: さらに遡ると、三陸では、こうした国際共同的な郷土芸能のプログラムが2013年頃からスタートしている。国内外のダンサーやアーティストが三陸に踊りを習いに來れるプロジェクト「習いに行くぜ！東北へ！！」や、郷土芸能を主軸とした「三陸国際芸術祭」(2014年～)。みんなのしるし代表で今回の総合演出・監修を務める前川十之朗さんは、それらのプログラムを立ち上げた中心人物の一人であり、今回の出演者にも、その頃から関わっていた人が多くいたみたい。

A: そうすると今回は集大成みたいなこと？

B: 集大成かはわからないけど、「この枠組みを今後グ



メインビジュアル

ローバルに展開していきたく」と前川さんは話していた。世界各地の自然災害や社会問題と結びつけることで、場所を限定せず各国で上演可能な作品を目指しているんだ。

A:なるほど、「国境を越えて広がる作品」ってことか。

## 習い合う、貸し借りする

B: 私たちオブザーバーが参加したのは、9月からの二度のオンラインでのクリエイションと、ショーケース公演のために陸前高田に滞在した5日間なんだけど、今回の制作プロセスを見て、まず率直にどう思った？

A: 現地に向かうと、我々が想定していた以上に様々な人がいたね。たとえば通訳スタッフは常に舞台上にいて各国チームのサポートをする。照明・音響スタッフや制作スタッフもいる。そのほか、呼びかけに応じて集まった舞台美術の制作に携わる陸前高田のサポートスタッフの人たちや、合宿期間中に開催された舞踊ワークショップに参加してショーケース公演の一部に出演する有志の子供たちもいる。

B: 日本チームの演者もかなり多様だったと思う。郷土芸能に関心が深いダンサーや音楽家も、バックグラウンドや専門はバラバラで一括りにできない。神楽の演者も、岩手の田野畑村から大宮神楽チーム、青森の八戸から鮫神楽チームが来ている。

A: 鮫神楽は、東京支部もあるらしくて、上京に伴い、神楽以外の身体表現を磨いている方もいた。だから一口に神楽と言っても、取り組み方はそれぞれ違う。

B: 「ガチャガチャしている」みたいな言葉が適切かわからないけど、各自が考えてきたことを披露し、それを擦り合わせるということを繰り返していた印象だな。前川さんが細部まで決め切るんじゃなくて、大まかなプロットとシーン分けを行った上で、適宜演者の中から演出リーダーを決めて、ある程度自由に作ってもらう。

A: ある種の「貸し借り」というか、互いに教え合うような対等なやり取りが活発だった印象があった。インドネシアの伝統舞踊や神楽の身振りを取り入れる時も、演者同士が貸し借りする感じ。「動作の技法を丸ごと習って自分の中に消化した上で、舞台上で一人で表現する」じゃなくて「お互いのできる範囲の動作を教え合っ



教える人・教わる人が反転しながら部分的に取り入れ合ってみる」みたいな。

## 自分の知ってる範囲だけでは舞台は作れない

B:びっくりしたのは、インドネシアや台湾のメンバーは、前川さんが想像するイメージをうまく汲み取って、スムーズに作品に入っていくんだよね。即興で「こんな音」とか「こんな入り方で」と言われても、パパッとすぐできちゃう。むしろどんどん提案して、それが採用される。彼らのこれまでの舞台経験からくる感覚って、ある程度グローバルなんだなと思った。日本チーム内の差異もあったよね。たとえば日本の演者同士も、演出のキーワードに微妙に方言が混じるから、その理解のズレを解消しながら調整したり。だから実はあんまり日本と海外という区別は本質的じゃないのかもしれない。

A:当然、2021年からの積み重ねもあるから、ある程度お互いの感覚や意図は共有されているような感じかな。

B:あとは、舞台用語も飛び交う。「もんじを飛ばす」とか。そういう舞台上のお作法みたいなのがあって、演者はみんなよく知っていたのかもしれないけど、今回は舞踊ワークショップに参加した地元の子供たちも舞台に立ったわけだから、そういう意味でも「多言語的」だよ。

A:自分が知っている範囲だけでは、舞台が作れないし、お互いの言葉や所作を部分的に取り入れて、学び合う技術が求められる。それはまさに私たちがプロセスオブザーバーとして彼らを知るプロセスとも重なるよね。私たちそれぞれの、神楽やアートマネジメント、フィールドワークの経験だけでは、この舞台作品の制作プロセスを評価することはできない。

## 生活とクリエイション、一旦帰宅

A:それにしてもさ、公演を作るために1週間現地に來るってすごいよね。

B:そうそう、特に神楽チームは普段は職人さんや学生など本職があった上で、業務とは違う形でこの作品に向き合ってる。

A:土地と結びついた、神楽のような郷土芸能って日常の暮らしの一部だし、今回みたいなプロジェクトに参加することがどれほど大変か、って思う。

B:ワークショップに参加

してた陸前高田の小学生が、「学校終わった後、水泳クラブに行って、その後家で宿題をして、それが終わったら来ます」って言ってたんだけど、「結局遅くなって来れなさそうです」みたいなこともあったんだよね。

A:この作品の根幹には、前川さんがいう「郷土芸能による祈りの力」が込められているわけだけど、今回の合宿の初日に、みんなで市長への表敬訪問と津波伝承館(「東日本大震災津波伝承館 いわてTSUNAMIメモリアル」)へ視察に行ったんだよね。それ以降、クリエイションに一気に入って行って目まぐるしく過ごしたから、ある演者さんは、震災や津波に思いを巡らしてパフォーマンスに活かすプロセスもさらに増やしていけたらという思いを公演後に話っていた。でも、この街に生活があるってことは、当たり前だけどひしひし感じたわけ。町の食堂とかスーパーとか横断歩道で連れ立って歩く中学生を見かけたり、ワークショップや舞台美術の制作で集まってきてくれた陸前高田の人たちとの関わりの中で。「住み続ける」人たちと「関わり続ける」人たちが、この合宿の中で交互に現れてきた感じ。

いつかテレビ番組で、「この土地に住み続けることが復興」っていう話を見た。「住み続ける」ってことはそこで仕事を持つことだから、ヒョイと一週間離れることはできない。だけど、出たり入ったりしながら、立ち会う、何度も訪れる、という形で関係を続けることはできる。「貸し借り」のイメージとも重なるよね。だからお別れの瞬間とか、たとえそれが一時的なことでもすごい清々しくて熱いんだよね。2日目の夜、大宮神楽チームの工藤淳泰さんが自宅のある田野畑村(陸前高田から車で2時間)まで仕事のために帰宅する時に、インドネシアチームと熱く挨拶を交わしてたのを覚えている。

B:2月の本公演、またみんなで集まれるからそれまで一旦帰宅だね。

(2025年11月)

